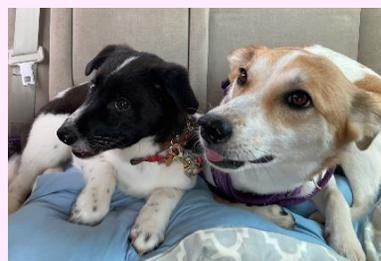


# 昭和 地域ニュース

No. 45 令和4年(2022年)  
7月号

発行 中野区昭和区民活動センター運営委員会  
編集 広報部会 昭和地域ニュース編集会議  
〒164-0001 中野区中野 6-16-20  
TEL : 03(3368)8164  
FAX : 03(3368)8168  
E-mail:nakano\_showa@nifty.com  
http://www.nakano-showa.gr.jp/



我が家のアイドル  
中野6丁目のHさんのお宅のワンちゃん。香川県まんのう町出身の、ろろ(右:道に座り込むのが趣味?)&くう(左:まだ赤ちゃんでビビり)です。

## 昭和通り二丁目商店会 物語①

編集部:自己紹介をお願いします。

須藤美奈子:私は昭和20年に結婚してこちらにきました。今年で96歳になります。

東(あずま)明美:子どもたちに、書道やわらを使ったわら筆の作り方を教えています。ここで生まれ育ちました。



東さんの作品

平野昌美:ここで生まれましたが、勤めが忙しかったので寝に帰るだけでした。今は桃園区民活動センターで小学生の勉強のお手伝いをしています。

石坂公人:私は今整形外科を開業していますが、昭和30年に父親が開業するので仙台から上京して来ました。桃二小、第三中で荒山さん、後藤さんと同窓生でした。小中学校は一緒に登下校したり遊んだりしていましたが、平成3年に開業したあと町会の方に顔を出すようになりました。

荒山幸次郎:この3人は昭和24年生まれです。私は現在の所で生まれました。親は、戦争で焼け出される前は東中野1丁目に住んでいました。祖父の代から建具屋で、父親も腕のある職人でした。

後藤英晴:私の家は、食べ物屋が少ない時代のパン屋でした。4人きょうだいで職人も3人いました。父は朝4時には起きていました。徳育幼稚園には3年通いました。その頃からの、地域と切り離せない思いが残っています。

編集部:商店街が一番賑やかだった頃の地図を作りたいので、ご協力をお願いします。

荒山:大企業の社宅が多かったですね。

石坂:桃二小の北側は大きな邸宅でした。お屋敷の雑木林の枝を走り回るリスの姿が、桃二小の窓から見られたものでした。

後藤:唐木屋さんの近くには駄菓子屋がありました。おばさんは、当たりが出るまで子どもたちがくじをやるのを見ていても、何も言わない方でした。

平野:その方は50代だったと思います。子どものたまり場でしたね。ご主人が電気屋さんでした。

荒山:歩道橋の近くには、カワイ肝油ドロップの研究所がありました。今もマンションの下に河合製薬があります。

後藤:郵便局もこの頃からありました。桃二小の給食のお金などを、各クラスに来て集金していました。

平野:いいですね。当時は普通教師が自分のクラスの分の集金をするので、大変だったんです。

後藤:徳育幼稚園は大正14年創立です。幼稚園の隣に染物工場があって、坂を利用していました。青い色が流れているのが面白くて、見ていました。坂の下はどぶ川でした。今は暗渠で昭和地域と上高田地域の小中学校の学区の境です。

荒山:今も学校や町会、警察や消防の境界です。中野と野方の。すごい坂だったから三輪車に乗っていて、川に落ちたことがあります。しかも後ろに女の子を乗せていて、二人とも落ちました。

東:昭和通りは農道ですよ。保善寺のところから曲がっています。

後藤:昔は朝早起きしてお豆腐屋さんで豆腐や納豆を買っていました。プラタナスの木も小さかったんですよ、65年ぐらい前。

東:今、昭和通りの街路樹はモッコクという木ですが、それ以前はスズカケノキ(プラタナス)でした。もみじ山通りの交差点から消防署までの区間だけスズカケノキ、それ以外の昭和通りはトウカエデでした。平成17年当時の小学生が、ほぜんじ幼稚園の



上段左から  
後藤様、荒山様、石坂様  
下段左から  
東様、須藤様、平野様

先々代の住職に聞いた話をご紹介します。

戦後、この辺りは焼け野原で何もなくなったので、ほぜんじ幼稚園の園長先生と町内会の方々が「街路樹を植えてほしい」と都庁まで相談に向いたそうです。昭和通りは都道なので。初め断られましたが、「皆さんが植えるのであればいい」と、新宿御苑で育てていたスズカケノキの苗木を分けていただき、上高田2丁目交差点から消防署までの区間に植樹したそうです。戦後何も無いところに「木を植えよう！」と発案したこと、自分たちで植樹したこと、皆さんの行動力は町会の歴史の素晴らしい1ページです。70年もの間、スズカケノキは町の移り変わりを見守ってくれました。

平野:我が家は「唐木屋」という店でした。職業がそのまま屋号です。仕事の中身は、インドなどが原産の紫檀、黒檀、花梨などの固く緻密な木材を材料としての和家具の製作です。釘を一本も使わず、接着剤は膠(にかわ)、塗料は漆やニスでした。ニス塗りの座卓やお盆は、熱いお茶の入った湯呑を置くと、糸尻が白く残りますが、漆塗りの物は跡が残りません。「和家具は古くなくても壊れても何度でも、木の生命が尽きるまで再生出来る」と言っていた父の言葉を思い出します。

※次号(令和4年10月号)に続きます。

